

平成 24 年度 教職員の自己評価集計結果とその考察（2 学期分）

藤 幼稚園

A : よく出来ている、B : まあまあ出来ている、C : あまり出来ていない、D : 出来ていない

上段の太い数字（2 学期）

下段の細い数字（1 学期）

I 保育の計画性

A 評価 B 評価 C 評価 D 評価

		29 %	71 %	0 %	0 %
園の教育方針等の理解	園の教育方針や教育目標を理解する	29 % (13)	71 % (60)	0 % (27)	0 % (0)
教育課程の編成	園の教育課程を理解し、それに基づいて保育の計画を立てる	18 (8)	73 (69)	9 (15)	0 (8)
指導計画の作成	指導計画は幼児の発達に即して幼児期にふさわしい生活を展開できるように具体的に作成する	0 (0)	90 (83)	10 (17)	0 (0)
環境の構成	幼児が主体的に関わりたくなるような素材や遊具を考えて環境を構成する	8 (0)	92 (79)	0 (21)	0 (0)
	幼児が自ら活動を展開していけるような場や空間の構成をする	15 (0)	77 (64)	8 (36)	0 (0)
	楽しい雰囲気の中で安心して遊びこめる環境を構成する	23 (0)	77 (79)	0 (21)	0 (0)
	幼児の発達や生活を見通した環境の構成をする	15 (0)	77 (71)	8 (29)	0 (0)
評価・反省	自分の保育を評価・反省することで、次の保育に生かす	7 (7)	79 (60)	14 (33)	0 (0)

1 学期と 2 学期の自己評価を比較しながら考察する。

まず、「園の教育方針等の理解」の項目では、「よく出来ている」（以下、「A 評価」という。）と「まあまあ出来ている」（以下、「B 評価」という。）を合わせて 100%（27%増）となっている。また、「教育課程の編成」の項目では、「A 評価」と「B 評価」合わせて 91%（14%増）、また、「指導計画の作成」の項目では、「B 評価」のみで 90%（7%増）であり、園の教育方針や教育目標を理解した上で指導計画を立てている。

また、「環境の構成」の項目では、幼児の主体性や発達を考慮して保育環境を構成していると自己評価した者は、「A 評価」と「B 評価」合わせて平均 96%を占め、前学期に比べ保育環境の充実を図ってきたことが窺える。

「評価・反省」の項目では、「A 評価」と「B 評価」を合わせて 84%（14%増）であり、自己の保育を見直すことで次の保育に生かそうとしている者が増えてきた。

II 保育のあり方、幼児への対応について

健康と安全への配慮	園内に危険な個所がないか、危険な遊び方はしていないか常に配慮し、危険が予測される時は安全な遊び方について幼児と一緒に考える	43 % (33)	57 % (60)	0 % (7)	0 % (0)
	園内の清掃や整理整頓、換気、採光、室温などに気を配る	50 (27)	50 (67)	0 (6)	0 (0)
幼児理解	個々の幼児の発達の姿や課題について、見通しをもって理解する	22 (13)	64 (60)	14 (27)	0 (0)
	幼児同士の関わりの姿を捉え、そこでの幼児の育ちを理解する	7 (6)	79 (67)	14 (27)	0 (0)
	幼児の理解のために家庭との連携をとる	0 (15)	92 (62)	8 (23)	0 (0)
指導との関わり	幼児の思いや考えに共感しながら、幼児と一緒に活動する	7 (13)	93 (80)	0 (7)	0 (0)
	幼児の話をよく聞いたり、スキンシップをとるようにする	36 (27)	64 (67)	0 (6)	0 (0)
	幼児が自ら考えたり工夫したりできるように見守り、行き詰まっているときには適切な援助をする	29 (13)	64 (74)	7 (13)	0 (0)
	幼児同士のトラブルに対し、適切な対応をするように心がける	14 (6)	79 (74)	7 (20)	0 (0)
保育者同士の協力・連携	クラスに関係なく、その場にいた保育者が適切な言葉がけや対応をするように心がける	7 (0)	79 (87)	14 (13)	0 (0)
	幼児のことについて保育者同士で話し合い、共通理解を図る	50 (40)	36 (33)	14 (27)	0 (0)

「健康と安全への配慮」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて100%を占め、「健康と安全への取組み」が全教職員に浸透している。また、「幼児理解」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて88%（13%増）であり、教職員は幼児理解に一層努力している。

また、「指導との関わり」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて平均97%（7%増）であり、殆どの教職員が幼児への関わりを重視しながら保育に当たっている。

「保育者同士の協力・連携」の項目では、「クラスに関係なく、その場にいた保育者が適切な言葉がけや対応をするように心がけているか」の問いに「A評価」と「B評価」合わせて86%であり、全園児を大切にしながら保育に当たっていることが窺える。また、「幼児について保育者同士で話し合い、共通理解を図っているか」の問いに「A評価」が50%（10%増）、「B評価」が36%（3%増）であり、協力・連携体制は整ってきている。

Ⅲ 保護者への対応について

情報の発信と受信	保護者からの相談や要望には心を開いて、よく話を聞くように心がける	14 % (20)	86 % (20)	0 % (20)	0 % (20)
対応上の心がまえ	保護者からの依頼や伝言などについては、メモをするなどきちんと対応する	29 (7)	64 (80)	7 (13)	0 (0)
クレームへの処理の仕方	クレームの内容によっては教職員全体で検討し、共通理解の上で対処する	54 (23)	38 (54)	8 (23)	0 (0)

「情報の発信と受信」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて100%（20%増）を占め、殆どの教職員が、保護者からの相談や要望には心を開いてよく話を聞くように心がけている。また、「対応上の心がまえ」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて93%（6%増）であり、保護者からの依頼や伝言にはきちんと対応するように心がけている。さらに「クレームへの処理の仕方」の項目では、「A評価」が54%（31%増）、「A評価」と「B評価」合わせて92%（15%増）であり、教職員は、より一層クレームの内容によって教職員全体で検討し、共通理解した上で対処している。

Ⅳ 地域や自然や社会との関わり

地域・自然・人々との関わり	地域の自然や主な施設の場所、交通機関、行事などについて理解するよう努める	0 % (0)	54 % (43)	46 % (50)	0 % (7)
小学校との連携	地域の小学校の行事や公開授業に参加するよう努める	0 (0)	33 (31)	17 (15)	50 (54)
子育て支援と地域への開放	子育ての支援や地域への開放に努めている	0 (0)	31 (15)	54 (46)	15 (39)

「地域・自然・人々との関わり」の項目では、「B評価」が54%（11%増）ではあるが、「あまり出来ていない」と答えた者は46%あり前学期に比べ改善されつつあるものの、地域等の関わりに課題を感じている教職員がまだいる。また、「小学校との連携」の項目では、「B評価」とした者は33%（2%増）と依然として低く、逆に「C評価」、「D評価」と答えた者は合わせて67%あり、小学校との連携は課題として残っている。

「子育て支援と地域への開放」の項目では、「B評価」とした者は31%（16%増）と改善されたものの、逆に「C評価」、「D評価」と答えた者は合わせて69%（16%減）あり、子育て支援や地域への園開放が引き続き課題である。

Ⅴ 研修と研究について

研修・研究への意欲・態度	研修会や研究会には自己の課題をもって参加する	9 % (0)	64 % (75)	27 % (0)	0 % (0)
	自分の保育のあり方や悩みについて、他の保育者や主任、園長に相談する	23 (14)	69 (64)	8 (22)	0 (0)
今日的課題に関する研修・研究 (複数回答可)	障がいのある幼児の理解と対応について研修する	0 (0)	45 (40)	33 (40)	22 (20)
	預かり保育や子育ての支援について研修する	0 (0)	11 (30)	56 (40)	33 (30)

	幼小連携の必要性や具体策について研修する	0 (0)	22 (22)	56 (45)	22 (33)
	危機管理の必要性と対応について研修する	0 (0)	22 (44)	78 (56)	0 (0)

「**研修・研究への意欲・態度**」の項目では、「研修会や研究会には自己の課題をもって参加しているか」の問いに「A評価」と「B評価」した者が73%あり、また、「自分の保育のあり方や悩みについて、他の保育者や主任、園長に相談しているか」の問いには「A評価」と「B評価」と答えた者は合わせて92%（14%増）と改善され、職場内で相談できる雰囲気は醸成されている。ただ、「研修会や研究会には自己の課題をもって参加しているか」の問いで「C評価」した者が27%おり、引き続き研修会や研究会への機会の設定、教職員間の相談体制の充実に努める必要がある。

また、「**今日的課題に関する研修・研究**」の項目では、前学期同様、十分でないと感じている者が多い。中でも、「預かり保育や子育て支援についての研修」では、「C評価（あまり出ていない）」と「D評価（出ていない）」を合わせて90%（20%増）近くにも上り、「幼小連携の必要性や具体策についての研修」でも「C評価」と「D評価」を合わせて78%あり、預かり保育や子育て支援、幼小連携の研修・研究を課題と捉えている者が依然として多い。

【全体の考察】

全体として、前学期に比べ、かなり改善されてきている。まず、保育の計画性では、園の教育方針や教育目標を理解した上で、子どもの発達状況や主体性を重視しながら日々保育に当たっており、保育のあり方や幼児への対応では、職場内で話し合ったりして共通理解を深め適切に行っており、保護者への対応では、これまで以上に全教職員が健康と安全に配慮し、また、教職員全体で話し合い、共通理解をした上で対処している。

地域や自然や社会との関わりでは、小学校との連携、子育て支援や園開放が、依然として大きな課題と捉えている教職員が多く、研修や研究については、自己の課題をもって参加したり、保育のあり方や悩みを職場内で相談する体制は整っているものの、「幼小連携」や「預かり保育・子育て支援」の研修や研究は、前学期同様、十分でないと感じている教職員が多い。